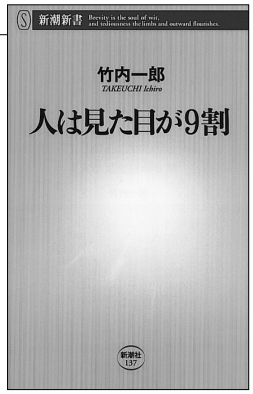
LIBRA SQUARE

Book 最近，おもしろかった本



『人は見た目が９割』

竹内一郎 著　新潮新書　714円（税込）

“非言語の情報”を改めて意識
日々の仕事の進め方を見直す契機に

我々弁護士は，主張書面や契約書を作成する際にはもちろん，相手方と交渉をする際にも，その表現の正確性や，ひとつの言葉の受け取られ方，主張展開の論理性に常に神経を使っている。比較的簡単な内容の書面を書く際にも，その文章に多義的な解釈の余地がないか，より適切な表現がないかを時間の許す限り考える。

しかし，この本ではまず「人が他人から受け取る情報のうち，言葉によるものは全体の7％にすぎない」という数字を示し，人がコミュニケーションにおいて受け取る情報の圧倒的大部分が，非言語によるものであるとする。そして，この言語によらないコミュニケーションを「ノンバーバル・コミュニケーション」として，人が意識しないうちにいかに多くの情報を非言語の要素から受け取っているかを，さまざまな事例（著者の職業の性格上，漫画と演劇が多いが）から紹介している。

先の「7％」という数字の根拠である「マレービアンの法則」自体は，異論がかなりあるようなのでこれをそのまま受け取らないように注意することが必要ではある。しかし，それでも本書を読み進めるうちに，ノンバーバル・コミュニケーションのもたらす情報を，我々がいかに無意識に取得し，重要な判断材料としているかが，自己の経験を振り返って納得できるようになる。さらには，これまで無意識に受け止めていた非言語の情報を改めて意識することで，ひとつひとつの非言語の情報に対して，新たな受け止め方が出来るようになる。

弁護士の仕事において，言語部分の正確性・論理性が当然の前提ではある。しかし，それ以外の多様な情報を意識することで，例えば相手方と対峙した際の交渉を有利に進めるヒントが得られるのではないか，そんなことを考えさせられた。

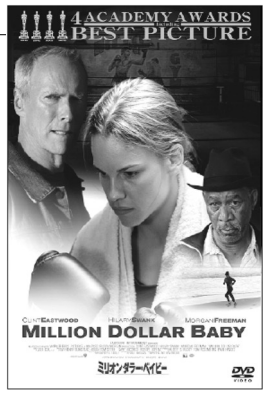
本書は，いわゆるマニュアル本ではないので，それを期待して読むことは薦めない（特にタイトルから想像する内容とはギャップがある）。ただ，ひとつの気づきを与えてくれ，日々の仕事の進め方を見直す契機となった本であった。

（会員　小林 大祐）

Cinema 心に残る映画

『ミリオンダラー・ベイビー』

2004年／アメリカ／クリント・イーストウッド監督作品



『ミリオンダラー・ベイビー』
発売元：ポニーキャニオン
販売元：ポニーキャニオン
価　格：3,990円（税込）

同じ孤独と喪失感を背負って生きる2人 当事者的に見ると大いなる共感

2005年度のアカデミー賞で，作品賞，監督賞，主演女優賞（ヒラリー・スワンク），助演男優賞（モーガン・フリーマン）の主要4部門を制覇した，クリント・イーストウッド監督の作品で，実の娘に縁を絶たれた初老のトレーナーと，家族の愛に恵まれない女性ボクサーの間に生まれる強い絆の物語を，慈しむようなまなざしで見つめたヒューマンドラマである。

トレーラー育ちの不遇な人生の中で，自分がひとつだけ誇れるものはボクシングの才能だけという思いを胸にしてロサンゼルスへやって来た31歳の主人公マギー。彼女は，名トレーナーのフランキーに弟子入りを志願するが，フランキーは「女性ボクサーはとらない」と言ってマギーを追い返す。しかし，マギーは強引にフランキーのジムへ入会して黙々と練習を続け，やがて彼女の真剣さに打たれてフランキーもトレーナーを引き受ける。フランキーの指導のもとにめきめきと腕をあげたマギーは，試合で連覇を重ね，瞬く間にチャンピオンの座を狙うまでに成長していき，それに伴って2人の間には，同じ孤独と喪失感を背負って生きる者同士の絆が芽生えていく。

と，ここまでが物語の前半部分。これだけだとある意味で陳腐なサクセスストーリーにしかみえない。しかし，タイトルマッチの最中に起こった出来事によって，物語の進行は大きく一変する。それからラストまでの約30分，マギーに降りかかった運命と，それに対応するフランキーの心の動き，そして決断。法曹として第三者的に見るとフランキーの決断には決して正しいとの評価は下せないが，2人の孤独な背景とそれまでの道のりを知った観客として当事者的に見ると大いなる共感を抱いてしまう。

是非，ご覧いただきたいお勧めの作品である。

（会員　髙畠 希之）